JAFAE Newsletter
No.59 (October 2023)

No.59 もくじ

第 51 回全国大会 基調講演レビュー　ジェイムズ・ダンジェロ(中京大学)
第 51 回全国大会 研究発表レビュー　田嶋美砂子(茨城大学) 藤原 康弘 (名城大学)
書籍紹介　藤原 康弘(名城大学)
事務局だより　柴田 美紀(広島大学)
ニューズレター編集担当より　田中　富士美 (金沢星稜大学)

Keynote Lecture

Grammatical features of Philippine and Japanese Englishes: A corpus-based analysis

Dr. Shirley N. Dita

De La Salle University

第 51 回全国大会(オンライン開催)

2023 年 7 月 15 日に全国大会がオンラインにて開催され、無事終了しました。ご参加いただいた皆様にお礼申し上げます。

総合司会:大会実行委員長　田中富士美(金沢星稜大学)
13:00－13:05 開会挨拶
会長　ジェイムズ・ダンジェロ(中京大学)

基調講演
司会:ジェイムズ・ダンジェロ(中京大学)
13:05－14:20 Grammatical features of Philippine and Japanese Englishes: A corpus-based analysis
Shirley N. DITA (De La Salle University, the Philippines)
14:20－14:30 休憩

司会:田嶋美砂子(茨城大学)
14:30－15:00
1. Writing Japanese occupation in English: Assessing the function of language in Chin Kee Onn's MA-RAI-EE
　二村洋輔(至学館大学)
15:00－15:30
2. Technology-Enhanced Learning of English in the Context of Asian Englishes: Implications and Opportunities
　GUO Jingshu (九州大学大学院生)

司会:藤原康弘(名城大学)
15:40－16:10
3. English diversity, language diversity, and teaching practices of Japanese high school teachers
　斉藤沙綾香(立命館アジア太平洋大学)
16:10－16:40
4. Some Pedagogical Hints for Introducing World Englishes to Japanese Learners
　川島智幸(群馬大学)
16:40－17:10
5.「ブータンにおける海外流出動向をめぐる 2 つの世代比較」
佐藤美奈子(京都大学)

17:10－17:15 閉会挨拶
事務局長　柴田美紀(広島大学)

基調講演レビュー

Keynote Lecture Review – Dr. Shirley N. Dita

James D'Angelo, Chukyo University

On July 15, 2023 Dr. Shirley N. Dita of De La Salle University in Manila delivered the keynote for our 51st Conference, entitled "Grammatical features of Japanese English: A corpus-based analysis." Her original plan was to also focus on Philippine English, but due to a rich new data corpus, she focused almost exclusively on Japanese English. The corpus in question includes three years of Japanese undergraduate graduation theses, n=42. The total number of words is 259,386, which Dita 'sanitized' to 198,672.

Dr. Dita has been working in the area of world Englishes for 20 years, with much of her work connected to syntax and use of the International Corpus of English (ICE). As such, to have her analyze this corpus, which she named the Corpus of Academic Japanese English (CAJE), was a great opportunity for JAFAE.

Important resources for ICE scholars are classic volumes such as, *A Comprehensive Grammar of the English Language* by Quirk, Greenbaum, Leech and Svartvik. ICE scholars usually use such volumes as a starting point for analyzing the more standard usage of various syntactic features. Dr. Dita opened her talk with several quotes from JAFAE founder Nobuyuki Honna in support of Japanese English, as well as a slide outlining the common features of English as a Lingua Franca, as identified by seminal ELF scholar B. Seidlhofer.

This issue of errors vs. creativity is challenging, since we world Englishes-informed scholars are quite open to creativity and view the students L1 as an asset, but at the same time, we are all very familiar with the troubles they have in producing English. Having someone like Dr. Dita look into such a corpus can give us a fresh perspective on the types of problems our students are having, and suggest areas to focus on, towards the ultimate goal of empowering them to use their own English in an effective way: for what Honna terms their own future "vocational and professional purposes."

Using powerful concordance software, Dita identified a wide range of salient features of the students' academic English. Students tend to overuse the present perfect progressive (has been verb+ing) in many of the samples. She found extensive use of quasi-modals, with has/have/had to, need to, want to, and be able to, being among the most frequent.

She also found issues with constructing parallel structures and conjoining linguistic items. ('compare' with rather than 'compared' with, in the second half of a sentence). Dita also identified considerable non-standard use of prepositions, which are similar to those found in Philippine English ('based from' rather than 'based on')

There were also a variety of features which she found hard to categorize. One example, "But if I am an LGBT person, and will be done outing, I <u>will be able not to become believing everyone</u>." Another (from a thesis on *omotenashi)* would be, "Greet your guests from the bottom of heart, embrace that it should be shared the enjoyable time." A third interesting sample was, "Furthermore, the Course of Study (2008) says foreign language education <u>can let students aware abundances</u> of the language and features of Japanese."

Dita ventured several preliminary observations. These include that: 1. Students rely heavily on translation software; 2. Dictionary/thesaurus come in handy for some words; 3. Some items, especially the small ones (auxiliary verbs, prepositions) tend to be left out; 4. There is confusion in the past and past participle forms of irregular verbs; 5. The writing was done in haste, thereby missing some minor edits.

Professor Dita closed on a thoughtful note, quoting the legendary Brother Andrew Gonzales (1983), one of her predecessors at De La Salle and the founder of WE in the Philippines. He asked"When does an error become a feature of X English?" She also drew on the important conditions of D'Souza (1998), "Is it widespread? Is it systematic? Is it used by competent users in formal situations? If the answers to these questions is yes, a usage can be seen as part of the standard.

Dita concluded with words of encouragement regarding the use of JpE: "It is a way of establishing your identity apart from other Englishes of the world; It is a way of promoting your own culture; It is a testimony of your linguistic curiosity and creativity; It is a sign of rich linguistic identity in your country; Japanese English will surely evolve in the future."

Let us all work to enable our students to realize this, and develop their own educated Japanese English.

研究発表レビュー　1

田嶋 美砂子（茨城大学）

基調講演後は、5 本の研究発表が行われた。以下に、本稿執筆者が司会を担当した前半 2 本の発表をまとめる。

1 つ目の発表は、NIMURA Yosuke 氏（Shigakkan University）による「Writing Japanese occupation in English: Assessing the function of language in Chin Kee Onn's *MA-RAI-EE*」である。本発表の目的は、英領マラヤ出身の Chin Kee Onn が執筆した *MA-RAI-EE* をとり上げ、この小説における言語の機能を調査することであった。NIMURA 氏によると、*MA-RAI-EE* に関するこれまでの研究は、物語に焦点をあてることが多かったという。一方、本発表では、Chin Kee Onn の言語選択が *MA-RAI-EE* にどのような影響を与えているのかという問いが立てられた。このように言語に関する事柄に着目することにより、*MA-RAI-EE* をよりよく理解するための新たな視座を提供している点が本発表の独創性であると言える。

MA-RAI-EE が出版された 1952 年は、英領マラヤの作家たちが独自の「英文学」を確立させようとしていた時期だそうである。それは、英国からの独立を果たす 1957 年を目前にし、ある種のナショナリズムが台頭していた時期でもある。このことに鑑みれば、Chin Kee Onn が *MA-RAI-EE* 内で、物語の本筋とは逸れる可能性がありながらも、マンダリン語由来、あるいはマレー語由来の語を用いたり、多様な民族的背景を持つ人物を登場させたりしているのには、彼の意図的な選択（この小説を「標準的な英文学」とは異なるものとして布置したいという思い）があったのではないかというのが NIMURA 氏の主張である。本発表は、コロニアル時代からポストコロニアル時代へと移行していく過程のマレーシアで執筆された「英文学」の独自性に、聴衆が改めて気づくきっかけとなった。

2 つ目の発表は、GUO Jingshu 氏（Kyushu University）による「Technology-enhanced learning of English in the context of Asian Englishes: Implications and opportunities」である。本発表の目的は、Asian Englishes という概念が広まりつつある中、アジア諸国に焦点をあて、英語学習を支援するテクノロジーの展望を探究することであった。

本発表ではまず、テクノロジーが英語学習者にもたらす利点が説明された。その 1 つとして挙げられたのは、「テクノロジーは地理的な境界をなくす」ということである。とりわけ、アジア諸国の中でも地方に居住する学習者がオンライン・プラットフォームを通じて質の高い学習環境にアクセスできることには、大きな意義がある点が主張された。

次に、中国、日本、韓国、インドにおける具体的なオンライン教材及びオンライン・プラットフォームが紹介された。GUO 氏によると、こうした教材やプラットフォームは、学習者が発音を練習したり、語彙を拡張させたりする際の一助になるという。さらに、言語面の能力伸長だけではなく、異文化間理解の促進にも資するとのことである。

このように本発表では、英語学習を支援するテクノロジーの大いなる可能性が示された。また、質疑応答時には聴衆から、本発表で言及されたオンライン教材及びオンライン・プラットフォームを実際に活用したときの学習者の変容を調査することへの興味・関心が寄せられた。

研究発表レビュー　2

藤原康弘（名城大学）

下記に本稿執筆者が司会を担当した後半 3 本の研究発表についてまとめる。

まず SAITO Sayaka 氏（Ritsumeikan Asia Pacific University）による発表、「English diversity, language diversity, and teaching practices of Japanese high school teachers」は、日本の中学校および高等学校の英語教師 6 人にインタビューを行い、言語多様性がどのように理解されているか、またその理解が教育実践にどのように影響するかを調査したものである。その分析的視点は、World Englishes (WE)、English as an International Language (EIL)、English as a Lingua Franca (ELF)、そして translanguaging を含めた学生の既存の言語レパートリーを活用することの 4 点である。

研究結果によると、英語の多様性に対する理解が教育実践に与える影響は、教師によって異なっていた。たとえば英語の多様性を積極的に取り入れ、Singlish のように"Janglish"の是非およびどの英語を日本で学ぶべきかについて話す授業を実践したり、文法的

正確性よりもコミュニケーション上の理解可能度を重視したり、学生の既存の言語レパートリーを活用することで、より包括的で包容的な英語教育を実践したりしていた。

この研究発表は、日本の英語教育において、World Englishes（WE）等の国際英語論を導入する上での課題や教育的示唆を提供している。残念ながら現状では、中学校や高等学校のコンテクストにおける言語多様性の統合に関する研究はまだ少なく、課題は多い。今後の研究の発展が期待される。

先の SAITO 氏の研究は国際英語論に基づく指導実践を各教員にインタビューする探索的なものであったが、次の KAWASHIMA Tomoyuki 氏（Gunma University）の研究、「Some Pedagogical Hints for Introducing World Englishes to Japanese Learners」は具体的な指導法における生徒の受け入れ度合いを検証的に調査するものであった。World Englishes (WE)を教室に取り込む重要性については議論されてきたものの、発表者が指摘するように、そもそも WE の音声教材の開発や指導方法の研究が不十分であることは否めない。日本の学習者の多くは、多様な背景を持つ英語話者の音声に耳が慣れていないため、WE の聞き取り教育が必要と言える。本研究は、大学生 120 人に対して、発表者作成のオンライン教材によるリスニング練習を 4 週間行い、ネイティブと非ネイティブの発話をいかに提供することが学習者の聞き取り困難度を軽減するかを検証した。

この研究の主たる関心事は、ネイティブと非ネイティブの発話を併用することで、日本の大学生の WE の聞き取り困難度が減少するか、及び学生のリスニング方法の選択が聞き取り能力のレベルと関連があるかどうかである。

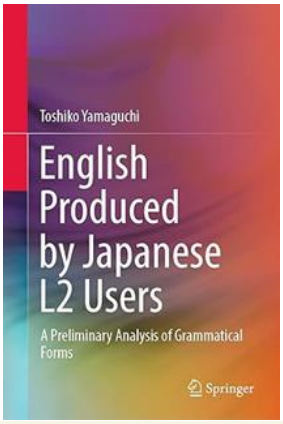
調査の結果、参加者の多くがネイティブと非ネイティブの音声の選択肢があることで、非ネイティブの音声のリスニングが促されることが示唆された。また学習者のリスニング習熟度とリスニング方法の嗜好に直接的な関係は見出されなかった。これらの結果から、日本の教室に WE を導入する際、ネイティブと非ネイティブの音声を並行して提供することは、合理的な教育法であることが示唆された。

最後の佐藤美奈子氏（京都大学）の発表、「ブータンにおける海外流出動向をめぐる 2 つの世代比較」は、ブータン人の英語や世界との関わりをとおして形成されるアイデンティティの世代間の差違にふれている。本発表は、準拠集団理論を研究における枠組みとし、ブータンの留学経験者／留学予備軍の動向を 2 つの世代を中心に比較分析したものである。ブータンは人口約 70 万人の国で、最近の若者の海外流出が問題となっている。研究対象は、(1) 20 代から 30 代で海外留学経験があり、現在は国内で国家公務員、教育者、または起業家として活躍する 30 代から 50 代、(2) 現在留学中の 20 代から 40 代の「留学経験者」と、(3) 高等教育機関の 10 代後半から 20 代前半の学生を「留学予備軍」として広く質問紙調査を行い、その一部に対面とメール形式による半構造化インタビューを行った。インタビュイーの留学先は、イギリス、オーストラリアだけでなく、インド、シンガポールなど多岐に渡る。その 7 名を留学第 1 世代と第 2 世代に区分し、比較分析を行った。

本研究の結果として、現在 40 代から 50 代で、多くがブータン政府の国費留学生や外国の提携校の奨学金受給生であった留学第 1 世代は、ブータンの伝統文化の復興とゾンカ語中心の文化政策を強化していた時期に留学しており、彼らはブータンの「国家像」を自らのアイデンティティの一部とし、留学を通じて習得した知識や技術で国に貢献することを使命として語る傾向がみられた。対照的に第 2 世代、特に COVID-19 禍以降の私費留学生は、国内の雇用の困難さや海外の機会を求め、先進国での生活を志向している。彼らは、第 1 世代のような同胞とのネットワーク作りや「ブータン人」としての集団アイデンティティを持つ姿勢は少なく、より個人としての「ブータン人」のアイデンティティを強く持つ傾向がある。そして彼らは外国での経験を新しいアイデンティティの土台として、それを基に自己の意見や考えを形成している。アジアにおける英語をとおした自己アイデンティティの再形成、および世代間の比較研究として興味深い。

書籍紹介

English produced by Japanese L2 Users: A Preliminary Analysis of Grammatical Forms (hardcover)
Toshiko Yamaguchi. (2022). Springer. pp. 128
ISBN-13: 978-9811938849



藤原康弘(名城大学)

英語の「多様性」と「日本英語」

性別、年齢、言語、国籍、人種、価値観、文化など、さまざまな側面で「多様性」の包摂が望まれています。英語教育も例外ではありません。学習指導要領、教員養成課程において、「英語の多様性」に配慮することが求められています。

しかし、多くの教材や学校では、英語母語話者の英語のみを「正」とし、その規範外のものを「誤」とする紋切型の思想が根強く、それでは多様性は生まれません。

本書は日本語母語話者の使用する英語を描写し、「日本英語」の発展可能性を吟味するとともに、第二言語（L2）の使用者が起こす “L2 innovation” とは何かを考える研究書です。

マルチコンピテンスの視座

本書で特筆すべきは、非母語話者の英語の「文法」に焦点を当てていることです。多様性を志向する国際英語論（World Englishes や English as a lingua franca）の研究では、第二言語使用者の音声、単語、談話・文体に着目したものが多く、文法を正面から取り扱うものは稀です。

著者は応用言語学者のクック氏が提唱する「マルチコンピテンス」の視座をとり、「第一言語話者と第二言語話者は根本的に異なる」という立場で、独自の文法の発達の可能性を積極的に認めています。

氏の研究プロジェクトでは、マレーシア滞在中の 32 名の日本語母語話者（おおむね学生 6 割、社会人 4 割）の英語による個人発話を録音し、小規模の話し言葉コーパス（約 2 万語）を作成しています。その各発話を複数の英語話者の眼で「標準」と「非標準」に分類し、後者の特徴を分析しています。

日本語母語話者が促す英語の “L2 innovation”

さて、実際にどのような文法形式が確認されたのでしょうか。氏は 1）前置詞、2）複数名詞、3) 他の文法項目の 3 つを章立てして、形式を描写し、説明を加えています。事例数は膨大ですので、その一部をご紹介いたします。

前置詞の使用では、World Englishes の分野で世界の英語話者の使用が指摘されてきた discuss / explain / teach about、日本語の転移（L1 transfer）とみられる reputation from（～からの評価）、また choose N between A and B（A と B の両者から、いずれかの N を選ぶ）を L2 innovation の可能性があると主張しています。

複数名詞の使用では、単複の区別を基本的に行わない日本語の影響もあり、単数形で複数概念を示す転移が見られると述べます。特に抽象名詞の場合（例：one of the reason）、また具体名詞においても一般的な事物を指す場合（I think Malaysian is strong）、複数の *s* が脱落するケースが多いと報告しています。

また一部の具体名詞の個人／個体を集合と捉え、単数形で表す傾向を報告しています。その代表例は、「桜」（cherry blossom）です（例：Cherry blossom is very beautiful）。筆者の指摘のとおり、単複や集合の判断は、話者が参照物をどう認識しているかを反映します。

他の文法項目の章では、冠詞、現在完了、文構造がまとめられています。先の前置詞の項目に少し関わりますが、日本語の主題話題構造の特徴を示す、About /For + N, S + V の表現が紹介されています（例：About my future plans, to be very honest, I'm really not sure about my future plans."）。日本語の主題優勢言語の特性は、過去に指摘されていたほど、転移しないことが分かりつつありますが、この文構造は日本人英語学習者には使いやすいかもしれません。

まとめ

第二言語話者を「劣った母語話者」と捉えた時代は過ぎ去り、独自性、創造性をもつ「第二言語使用者」と考えるパラダイムに変わりつつあります。一方で日本人英語使用者はどのように英語を使用しているか、またどのような英語を目指すべきかの研究や議論はまだ十分とは言えません。

その状況において、本研究は多くの示唆を与えるものです。しかしながら、学習者と使用者の区分が曖昧、サンプル数が少ない、事例の解釈が恣意的など、多くの課題を残しています。

多様性への配慮を通じた日本の英語教育の転換、英語学習者の自律のために、本書と近い立場をとる方向性のさらなる研究が望まれます。

謝辞
本稿は下記を転載したものです。転載許可をいただきました大修館書店にお礼申し上げます。
藤原康弘（2023）「海外新刊書紹介：English Produced by Japanese L2 Users: A Preliminary Analysis of Grammatical Forms」『英語教育』（大修館書店）, *72* (4), 72-72.

事務局だより

柴田 美紀 (広島大学)

第 52 回全国大会は名城大学で 1 月 28 日（日）に開催予定です。前日の 27 日（土）には同会場で JACET ELF SIG の第 6 回国際ワークショップが開催されます。詳細につきましては事務局から改めてご案内いたします。

The 52nd National Conference will be held at Meijo University, Nagoya, Japan on the 28th January. On the day before, the 27th, the 6th International Workshop of JACET ELF SIG will be held at the same venue. For detailed information, we will provide detailed information from the secretariat at a later time.

第 52 回全国大会
52nd National Conference
名城大学 ナゴヤドーム前キャンパス
Meijo University, Nagoya
2024 年 1 月 28 日(日)
January 28, 2024

Keynote Speaker

Dr. Edgar W. Schneider

Professor Emeritus,
University of Regensburg

ニューズレター編集担当より

田中 富士美 (金沢星稜大学)

会員の皆さまのおかげで、無事、ニューズレター59 号を刊行することができました。ありがとうございました。

ニューズレターは会員の大切なコミュニケーションの場ですので、会員の皆様からのご投稿を歓迎しております。国内外の紀行文、本学会会員出版の書籍紹介 (本学会の趣旨に関連するもの)、海外情報など、「アジア」「英語」「言語」周辺をキーワードに、日本語 800～1,200 字程度、あるいは英語では A4 用紙 2/3～1 ページ程度の分量でおまとめいただければ幸いです。編集の都合上、投稿を希望される方はあらかじめ、ニューズレター担当理事までご連絡下さるようお願い申し上げます。

2023 年 10 月 1 日発行
編集・発行 日本「アジア英語」学会
代 表 者 ジェイムズ・ダンジェロ（中京大学）
事務局長 柴田美紀（広島大学）
編 集 長 田中富士美（金沢星稜大学）
事 務 局 〒739-8521 広島県東広島市鏡山 1-7-1
広島大学 総合科学部国際共創学科 柴田美紀研究室内
E-mail: jafaeoffice@gmail.com
学会ウェブサイト：http://www.jafae.org
年会費振込先：
ゆうちょ銀行から振込
口座番号 00280-8-3239
他金融機関からの振込
ゆうちょ銀行 支店 〇二九店（ゼロニキュウ）
当座 口座番号 0003239

<< JAFAE Secretariat >>
Office:
c/o SHIBATA, Miki
School of Integrated Arts and Sciences
Department of Integrated Global Studies
Hiroshima University
1-7-1 Kagamiyama, Higashi-Hiroshima, Japan 739-8521
E-mail: jafaeoffice@gmail.com
JAFAE's website: http://www.jafae.org
JAFAE's postal transfer account number:
00280-8-3239